

拝啓 時下、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。平素は格別のご高配をいただき厚くお礼申し上げます。

当館では2018年11月3日〔土・祝〕より2019年1月14日〔月・祝〕まで、「小平篤乃生 | 鳥巡り」を開催いたします。広島出身の小平篤乃生(1979-)は、現在フランスを拠点とし「あらゆるメディアや歴史は緩やかに絶え間なく繋がっている」という考えのもと、五感を喚起させる体感的な場と作品をつくり続けています。青年期から海外で暮らす小平は、特に日本の自然崇拜と地場産業に関心をもち、考古学とは別の視点や解釈からの歴史を提示し、国家が成立する前の人間の営みや自然との共存を探し求めてきました。近年広島県の宮島と和歌山県の熊野での制作を経験してきたなかで、偶然にも二つの土地をカラスが巡るといった伝承を知ります。本展では、このカラスの行動を自然循環の象徴と見立てた新作ビデオを中心に、それぞれの土地で制作したオブジェなどによる大規模なインスタレーションで構成します。カラスが巡ることにより、宮島のしゃもじづくり、熊野の煤づくりといった地場産業と山岳信仰との関係性を探り、ひいては私たちのアイデンティティまで巡っていきます。

また小平篤乃生は、花士・珠寶、陶芸家・西井久芳とコラボレーションし、宮島の自然の恵みで芸術作品を作り上げる企画「島の器」を同時進行しています。このたび厳島神社に於いて完成した器とともに珠寶が献花を行います。

つきましては、是非このたびの展覧会、献花を貴社媒体上でご紹介いただきたく、周知・告知活動にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

敬具

◆ 小平篤乃生 | 鳥巡り

会期：2018年11月3日 | 土・祝 | - 2019年1月14日 | 月・祝 |

開館時間：11:00 - 18:00 (最終入館は17:30)

休館日：火・水曜日、12/30-1/3 (但し11/14はイベントのため開館)

観覧料：500円(400円) ()内は学生、10名以上の団体料金。高校生以下または18歳未満・各種障害者手帳をお持ちの方は無料

主催：公益財団法人みやうち芸術文化振興財団

協力：YUMIKO CHIBA ASSOCIATES、包ヶ浦自然公園管理センター 後援：廿日市市教育委員会

レセプション・パーティー

2018年11月14日(水) 14:00~18:00

トーク：小平篤乃生、珠寶(花士)、西井久芳(陶芸家) 14:00~15:00頃まで

参加費：無料(但し要入館券) ※予約不要、どなたさまでも歓迎

◆ 献花 | 島の器

日時：2018年11月13日 | 火 | 15:00~(30分程度)

場所：厳島神社祓殿(広島県廿日市市宮島町1-1)

※祓殿への一般入場不可。但し祓殿外から見学可。

主催：島の器制作委員会 協力：包ヶ浦自然公園管理センター 後援：アートギャラリーミヤウチ

小平篤乃生(こひら・あつのぶ)

1979年広島生まれ。パリ国立高等美術大学時代にジュゼッペ・ペノーネ氏に師事し、ル・フレノア国立現代アートスタジオでメディアアートを習得。2012年には文化庁海外研修生として音の研究を行い、現在は、ヨーロッパでさまざまなプロジェクトに参加、活動している。体感的な場と作品を作り続けている小平にとって、五感の全てを駆使した表現方法を模索することは制作そのものでもあり、「物質の変化と移ろい」は常に関心を寄せているテーマの一つである。制作の方法も既成にとらわれず、素材と五感の関係を自由に組み替えることで、人間が持つ野生の思考を喚起させる。小平にとってアイデンティティは、国単位では収まらない。国家が成り立つ以前の人間の営みや自然との共存こそが彼の探し求める源流である。主な個展に、「Seek hope, who enter here」(The Chimney、ニューヨーク、2018)、「Carbon Variation N° 1」(ユミコチバアソシエイツ、東京、2017)、「Coalscape 石炭のインキ」(KG+、京都、2017)、「Outretemps」(Galerie Maubert、パリ、2016)、「Ouverture de Bombyx Mori」(ヨーロッパ写真美術館、パリ、2013)など。

■ お問い合わせ

アートギャラリーミヤウチ【担当：今井】

T: 0829-30-8511 F: 0829-39-8931 E: agm@miyauchiaf.or.jp

● 「鳥巡り」展示構成

ギャラリーの1Fから3Fまでをそれぞれ「海」「陸」「空」とし、自然循環の構造に見立てていきます。

ビデオ、音、写真、オブジェなどを組み合わせ、可視化できないエネルギーや歴史を空間全体で体感する構成となります。

● 1F (海)

宮島の浜辺にある錨を展示。3層になる展覧会を繋ぎ止める役割を担う。展覧会そのものがギャラリーミヤウチに停泊している事を暗示するものである。

● 2F (陸)

宮島では各浦に祠があり「御島巡り」という祭事で巡拝する。この儀式は島全体が御神体である象徴の一つである。ギャラリーの建築全体を支える柱が空間中央部にあり、それを中心に2階の空間全体を島に見たて7つの作品を展示する。熊野古道をテーマにした作品群と、宮島をテーマにした作品群（制作中）を台座に置き展示する。2階全体の床には、特殊な墨を用いた壁画ドローイング作品を床一面に描き、3階で上映するビデオ作品《鳥巡り》の音源をスピーカーで流す。

● 3F (空)

新作のビデオ作品《鳥巡り》を上映するとともに、カラスの鳴き声が木霊する空間になる。

● 階段

熊野と宮島で制作した写真作品をスライドプロジェクションする。フィルム写真のスライドが切り替わる機械音がリズムを作り各階を繋げていく。



宮島の錨



"古道" (2017) 鹿の頭蓋骨、棒状の墨



"鳥巡り" 映像



"Graphite sculpture 2.0" (2015)

シャープペンシルの芯、ドライフラワー、糊

●「島の器」について

「島の器」は小平篤乃生の発案を基に現代アート、陶芸、花道という異なるメディアを駆使し、宮島の自然と霊的エネルギーを具体化する試みである。宮島では自然への畏敬からも見て取れるように、古くから精霊たちが至るところに潜む。島全体は花崗岩を礎に形成されており、長い年月を経て岩から石へ、石から土や砂へと風化する。いわば弥山の頂上に鎮座する巨石群と浜辺の砂は元々は同じ塊であったといえ、風化とともに宮島の歴史を刻んだ鉱物である。弥山の原始林では代謝される枯れ木や落ち葉は腐葉土として自然に還る一方、人口が集中する地域では廃棄物が生じる。例えば建物の修復や、環境整備から発生する材木や落ち葉、ゴミなど。しかし今日の宮島を形成する上で忘れてはならないエレメントである。

本企画では、宮島の砂と廃材、この二つにフォーカスを当てて器の制作、花いけを通じて宮島に宿る精霊たちと交流を図り、この島の成り立ちを探っていく。器は陶芸家の西井久芳が制作。宮島の砂から形成し、窯入れの際には「消えずの火」を分けてもらい廃材を用いて焼き固めた。そして、完成した器に花士の珠寶（しゅほう）が厳島神社にて献花を行う。厳島神社という神聖な空間で祈禱を捧げ、献花をすることで「島の器」は初めて完成する。

あらゆるジャンルを超えて制作をする小平にとってこの企画を指揮することは、より深く島の歴史や自然を研究できる最良な機会であり、挑戦でもある。この制作を丁寧に進め、過程を写真や動画に納め、作品として世界各地で発表し多くの人々へ宮島の魅力を普及していく。



Photography : Tadayuki Minamoto

花士 珠寶（はなのふ しゅほう） www.hananofu.jp

2004年から14年まで、京都の慈照寺（銀閣寺）花方を務め、境内禅堂に開場された「慈照寺研修道場」にて、いけばなを担当。国際文化交流事業では、主にフランスや香港で毎年開催の交流事業にて、また、アメリカ、メキシコ、台湾などでの国際文化交流プログラムを担当し、国や民間の文化施設や団体などと交流。音楽や現代アート、工芸、建築などの分野の国内外のクリエイターとも協働。国内外の音楽フェスティバルや展覧会などのイベントにも参加。2015年に独立し、草木に仕える花士（はなのふ）として、大自然や神仏、時、ひと、場所に花を献ずるなど、花をすることを続けている。同年、青蓮舎花朋の會を設立。京都、九州、東京の教場で、花を通して、豊かな生活時間を作ることを提案している。

2016年からは、香港に加え中国本土での活動や、外務省が日本文化を海外で発信する事業「JAPAN HOUSE」にも関わる。2017年4月より、京都造形芸術大学美術工芸学科客員教授として教鞭をとる。著書に『造化自然 - 銀閣慈照寺の花 -』（淡交社）、『一本草 - 花が教える生きる力 -』（徳間書店）など。Love for all、花を通して人と人、人とモノをつなぐ。

西井久芳（にしい・ひさよし）

1980年京都に生まれる。嵯峨芸術短期大学部で陶芸、京都府立陶工高等技術専門学校で職人の技術を学ぶ。その後、陶芸家鈴木五郎氏に師事。愛知、岐阜県を中心に土、鉱物の研究を行い、自然のなかで採取した素材を原料とする制作スタイルへとシフトチェンジ。2008年に大阪府豊能郡にアトリエを構え独立。銀閣寺研修道場の花器、明治学院大学の茶室（明霽舎）の蹲、滋賀県陶芸でのレジデンスや多岐にわたるクリエイターとのコラボレーションを手がける。現在、滋賀県信楽町多羅尾山中にアトリエを移し、地質学者のようなフィールドワークをベースに土地の原料を採取し焼き物を作る方法で、現代社会における自然と人間の距離や在り方について探求をつづけている。

